

# 実学の伝統

商学部や経営学部をもつ大学で、しばしば掲げられる教育方針として「実学教育重視」がある。本学における実学は、前身である小樽高等商業学校の初代校長渡辺龍聖氏（在職：明治44年 大正10年）による「学者養成ではなく、卒業後直ちに実務に当たっても、何等不便を感じることはない実務家を養成しようとする方針である」とする建学の精神まで遡る。

今号では、開学当初の実学の象徴ともいえる「高商石鹸」の製造・販売に目を向け、そこから本学における実学重視の伝統をたどることにしたい。

## 実学重視は学科目から うかがえる

渡辺校長の実践を重んじる考え方のもと、とりわけ商品関連の学科目の充実ぶりは記録からも明らかである。大正元年の『小樽高等商業学校一覧』のなかに、当時の授業科目がどのように編成されていたかを知ることができる。修身、商業文、英語から始まって、第二外国語および体操に終わる20の学科目のなかに、経済学、財政学、法学通論、民法・商法、簿記、商業学などが含まれていて、そこには時代の要請に応えうる素養を持った産業人の養成を目的としていることがうかがえる。また、この授業科目の編成に見られる顕著な特徴として、「工業大意」「応用理化学」「商品学」「商品実験」のような自然科学系統の科目が多いことである。

赤レンガ造りの商品陳列館外観  
(大正12年度卒業アルバムより)

## 企業実践工場の設立 「高商石鹸」を製品化

本学が昭和36年に発行した『緑丘50年史』には「商業実践を重視し、学科目のなかでもこれが大きな特色となっていたが、これをもう一步進めて実際に商品を生産・販売し、企業経営の実際をおこなおうとする企てが、大正八年ごろから国松教授を中心として研究されていた。中略（石鹸）工場は官舎街の一隅に新設され、なかに研究部、企画部、製造部、原価計算部がおかれ、教官指導のもとに学生が仕入れ、製造、市場調査、労務管理、原価計算など一切の仕事をおこなうものであった。製品の品質も国立工業試験所から優良の折紙つき、町の人からも『高商石鹸』として親しまれ、企業としても教育上からも大きな成功を収め(た)。

後略」とあり、当時の実践教育の成功とにぎわいぶりを想像することができる。また、石鹸工場設立にあたっては、ドイツ人教師ルイス・フーゴー・フランクの存在も特筆すべきことである(後述)。そして、伊藤整もその著『若い詩人の肖像』のなかに、雑誌を作るために高商石鹸を小樽の花園町で売ったと記している(次頁参照)。

## 製品を使う人の視点 「消費者教育」の考え方も

企業活動は、製品やサービスの生産と販売をめぐる展開されるものであるから、産業にあつては、おのずと提供しようとする製品の生産効率と品質が問題となってくる。その問題に踏み込もうとすれば、生産工程の技術的側面にまで至ることになる。高商時代の教育実践が工業学校的な風景をともなったのはそのためであるが、しかし、その教育が産業教育の範囲に限られなかったことは、指摘しておかなければならない。消費者教育もその視野の中にあつた。すなわち、商品学を担当していた小原亀太郎教授(在職：明治45年 - 大正11年)は、北海道を拠点として、わが国における自然科学的商品学の体系的源流をうち立てた人

